殺生石

楠山正雄

一

むかし後深草天皇（ごふかくさてんのう）の御代（みよ）に、玄翁和尚（げんのうおしょう）という徳（とく）の高（たか）い坊（ぼう）さんがありました。日本（にっぽん）の国中（くにじゅう）方々（ほうぼう）めぐり歩（ある）いて、ある時（とき）奥州（おうしゅう）から都（みやこ）へ帰（かえ）ろうとする途中（とちゅう）、白河（しらかわ）の関（せき）を越（こ）えて、下野（しもつけ）の那須野（なすの）の原（はら）にかかりました。

那須野（なすの）の原（はら）というのは十里（り）四方（ほう）もある広（ひろ）い広（ひろ）い原（はら）で、むかしはその間（あいだ）に一軒（けん）の家（いえ）も無（な）く、遠（とお）くの方（ほう）に山がうっすり見（み）えるばかりで、見渡（みわた）す限（かぎ）り草（くさ）がぼうぼうと生（お）い茂（しげ）って、きつねやしかがその中で寂（さび）しく鳴（な）いているだけでした。玄翁（げんのう）はこの原（はら）を通（とお）りかかると、折（おり）ふし

秋の末のことで、もう枯れかけたすすき尾花が白い綿をちらしたように一面にのびて、その間に咲き残った野菊やおみなえしが寂しそうにのぞいていました。

玄翁和尚は一日野原を歩きどおしに歩いてまだ半分も行かないうちに、短い秋の日はもう暮れかけて、見る見るそこらが暗くなってきました。この先いくら行っても泊る家を見つけるあてはないのですから、今夜は野宿をするかくごをきめて、それにしても、せめて腰をかけて休めるだけの木の陰でもないかと思って、夕やみの中でしきりに見ましたが、一本のひょろひょろ松さえ立ってはいませんでした。それでもと

思ってまた少し行ってみると、草原の真ん中に、大きな石の立っているのが白く見えました。

「やれやれ、これで露をしのぐだけの屋根が出来た。」

と玄翁はつぶやきながら石のそばに寄ってみますと、ちょうど人間の背の高さぐらいのすべすべしたきれいな石でした。玄翁は石の頭に笠をかぶせ、草を結んでまくらにして、つえをわきに引き寄せたまま、ころりと横になりますと、何しろくたびれきっているものですから、間もなくとろとろと眠りかけました。

するとしばらくして、眠っているまくら元で、

「和尚さま、和尚さま。」

とかすかに呼ぶ声がしました。初めは夢うつつでその声を聞いていましたが、ふと気がついて目をあけますと、もう一面の真っ暗やみで、はるかな空の上で、かすかに星が二つ三つ光っているだけでした。

「すると今しがただれか呼んだと思ったのは、気の迷いであったか。」と玄翁は思って、起き上がりもしずに、そのまま目をつぶって寝ようとしました。するとまたうしろの方で、こんどは前よりもはっきり、

「和尚さま、和尚さま。」

と呼ぶ声がしました。

こんどこそ間違いはないと玄翁が思って、ひょいと

起き上がりますと、どうでしょう、さっきの石のあった所がほんのり明るくなって、そのかすかな光の中に若い女のような姿がぼんやり見えていました。

玄翁もさすがにびっくりして、その女に向かって、

「呼んだのはあなたですか。あなたはどなたです。」

とたずねました。

すると女はかすかに笑ったようでしたが、やがて、

「びっくりなさるのはむりはありません。わたしはこの石の精です。」

といいました。

「その石の精がどうして迷って出て来たのです。何か

わたしに御用があるのでしょうか。偶然ながら、こうして一晩のお宿を願ったお礼に、何かして上げることがあれば何でもしましょう。」

と玄翁はいいました。

すると女は涙をはらはらとこぼして、

「あなたは有り難いお坊様のようですから、くわしくわたしの話を聞いて頂いて、その上にお願いがあるのでございます。お聞きになったこともあるでしょうが、じつはわたしは、むかしなにがしの院さまの御所に召し使われた玉藻前という者でございます。もとをいいますと天竺の野に住んだ九尾のきつねでした。き

つねは千年たつと美しい人間の女に化けるものです。わたしも千年の功を積むと、きれいな娘の姿になりました。するとある日天羅国の班足王という王さまが狩りの帰りにわたしを見つけて、御殿に連れ帰ってお后になさいました。わたしは長い間きつねでいた時分人間にいじめられとおしてきたことを思い出して、ふと悪い心がおこりました。そこである時天羅国にいろいろと天災がおこって人民が困っていると、わたしは班足王にすすめて、これはお墓の神のたたりですから、これから毎日十人ずつ人の首を切って、百日の間に千人の首をお墓に供えてよくおまつりなさい。

きっと災いをのがれることができますといいました。じつは天災というのもわたしが術をつかってさせたのですが、王はこれを知らないものですから、わたしのいうとおりに、毎日罪のない人民を十人ずつ殺して、千人の首をまつりました。すると人民が王をうらんで、ある時一揆を起こして王を攻め殺しました。そしてわたしを見つけて、生け捕りにしようとさわぎました。わたしはとうに逃げ出して、山の中にかくれました。そうして何百年かたちました。

二

そのうちわたしはまたシナの国(くに)に渡(わた)って、殷(いん)の紂王(ちゅうおう)というもののお妃(きさき)になりました。あの紂王(ちゅうおう)にすすめて、百姓(ひゃくしょう)から重(おも)いみつぎものを取(と)り立(た)てさせ、非道(ひどう)の奢(おご)りにふけったり、罪(つみ)もない民(たみ)をつかまえて、むごたらしいしおきを行(おこな)ったりした妲妃(だっき)というのは、わたしのことでした。紂王(ちゅうおう)がほろぼされると、わたしはまた山の中にかくれて、何(なん)百年(ねん)か暮(く)らしました。

おしまいに日本(にっぽん)の国(くに)に来(き)て、院(いん)さまのお召(め)し使(つか)いの女になって、玉藻前(たまものまえ)と名(な)のりました。わたしをおそばへお近(ちか)づけになってから、院(いん)さまは始終(しじゅう)重(おも)いお病(やまい)に

おなやみになるようになりました。院さまのお命をとって、日本の国をほろぼそうとしたわたしのたくらみは、だんだん成就しかけました。それを見破ったのは陰陽師の安倍の泰成でした。わたしはとうとう泰成のために祈り伏せられて、正体を現してしまいました。そしてこの那須野の原に逃げ込んだのです。けれども日本は弓矢の国でした。天竺でも、シナでも、一度山か野にかくれればもうだれも追いかけて来る者はなかったのですが、こんどはそういきませんでした。間もなく院さまは三浦の介と千葉の介と二人の武士においいつけになって、何百騎の侍で那須野の原を狩

り立ててわたしを射させました。わたしはもう逃げ道がなくなって、とうとう二人の武士の矢先にかかって倒れました。けれども体だけはほろびても、魂はほろびずに、この石になって残りました。わたしの根ぶかい悪念は石になってもほろびません。石のそばに寄るものは、人でも獣でも毒にあたって倒れました。みんなは殺生石といって、おそれてそばへ寄るものはありませんでした。それが今夜あなたに限って、殺生石のそばに夜を明かしながら、何にも災いのかからないのはふしぎです。これはきっと仏さまの道を深く信じていらっしゃる功徳に違いありません。あ

なたのような尊(とうと)いお上人(しょうにん)さまにお目(め)にかかったのは、わたしのしあわせでした。どうかあなたのあらたかな法力(ほうりき)で、わたしをお救(すく)いなすって下(くだ)さいませんか。わたしはもう自分(じぶん)ながら自分(じぶん)の深(ふか)い罪(つみ)と迷(まよ)いのために、このとおり石になってもなお苦(くる)しんでいるのでございます。」

こういって、女はほっとため息(いき)をつきました。

玄翁(げんのう)はだまって、じっと目をつぶったまま、女の話(はなし)を聴(き)いていました。やがて女の長(なが)い話(はなし)がおしまいになりますと、静(しず)かに目をあいて、やさしく女の姿(すがた)を見(み)ながら、

「うん、うん、分かった。わたしの力の及ぶだけはやってみよう。安心して帰るがいい。」

といいました。

女はにっこり笑って、すっとかき消すように見えなくなりました。

そうこうするうちに、いつか夜がしらしら明けはなれてきました。玄翁ははじめてそこらを見回しますと、石はゆうべのままに白く立っていました。見ると石のまわりには、二三町の間ろくろく草も生えてはいませんでした。そして小鳥や虫が何千となく重なり合って死んでいました。

玄翁（げんのう）は今更（いまさら）殺生石（せっしょうせき）におそろしい毒（どく）のあることを知（し）って、ぞっとしました。

もうすっかり明（あか）るくなって、日が昇（のぼ）りかけました。草（くさ）の上の露（つゆ）がきらきら輝（かがや）き出（だ）しました。

玄翁（げんのう）は殺生石（せっしょうせき）の前（まえ）に座（すわ）って、熱心（ねっしん）にお経（きょう）を読（よ）みました。そして殺生石（せっしょうせき）の霊（れい）をまつってやりました。殺生石（せっしょうせき）がかすかに動（うご）いたようでした。

やがてお経（きょう）がすむと、玄翁（げんのう）は立（た）ち上（あ）がって、呪文（じゅもん）を唱（とな）えながら、持（も）っていたつえで三度（ど）石をうちました。するとかに石は真（ま）ん中（なか）から二つにわれて、やがて霜柱（しもばしら）がくずれるように、ぐさぐさといくつかに小さ

くわれていきました。
その後旅（のちたび）の人が 殺生石（せっしょうせき） のそばを通（とお）っても、 もう災（わざわ）いはおこらなかったそうです。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
　　１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年８月２日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。